ミュージアムが子供たちの「第三の場所」に――

『あいうえの』がスタート

東京都美術館
アート・コミュニケーション
担当係長（学芸員）
稲庭 彩和子

今、あちこちで注目されているキーワードに、「第三の場所」というのがある。これは1989年にアメリカの社会学者レイ・オルデンバーグが提唱したもので、「第一の場所が家庭、第二が職場や学校、そして第三の場所はそれ以外の、誰かと交流を持つことが出来るくつろげる場所」のこと。特に、都市で暮らす人々には第三の場所が必要で、その「第三の場所」の活性度が街の豊かさの指標にもなるという。

子供たちにも「第三の場所」が必要だということを、私に気づかせてくれたのは美術館に時々来る中学生のふとした言葉だった。「何か学校でもない、家でもないところ。だからホッとする」と。学校のことも家のことも嫌になった時、美術館に来ると何だか自分を取り戻せるらしい。

「僕」に日常的に関わる大人は、「親」か「先生」だけれど、美術館は非日常だから、日常の「僕」に対する先入観はゼロになる。美術館で出会う大人との間には、期待される役割や上下関係などがない。だから自分をリセットできるというわけだ。

美術館で出会う大人は様々だ。学芸員、ボランタリーに活動している大人、はたまた生きている大人に限定されず、作品を通して過去の芸術家との対話も出来る。ミュージアムは日常を超えて、普段のしがらみがなく振る舞える場所。素の自分を振り返り、誰かとも交流できる開かれたパブリックな居場所になり得る。美術館をはじめとするミュージアムは、非日常的な場所だからこそ「第三の場所」になりやすい。

上 地域の廃材を使ったワークショップに興味津々
右 「あいうえの」のロゴマーク

博物館で初めて肯定感

ディスレクシア（難読症）と呼ばれる学習障害を持つイギリスの友人の話だ。彼は文字がうまく読めず、小学校の時とても苦労した。当時はその障害を知る先生も少なくて、彼は勉強に対してひどい劣等感を持っていた。しかし10歳の頃のある日、地元の博物館に連れて行ってもらい、そこに広がる知の世界に驚嘆する。

「文字ではなく、『モノ』から知ることの出来る世界がこんなふうに広がっているなんて！」と、涙が出るほどうれしかったらしい。一日中飽きずに、その展示室に広がる世界を楽しんだ。文字からの勉強と違い、自分の住む世界が具体的なモノを介して自分とつながり、自分もその世界の一員として肯定された気持ちがしたという。その後、彼の学びのフィールドは学校からミュージアムに。イギリスのミュージアムは大抵無料というのも大きい。

世界屈指のミュージアム密集都市・上野

子供たちのミュージアム・デビューを応援し、「第三の場所」となりたい。そして「モノを介して広がる知のワンダーランド」へ招待したい！

そうした思いが詰まったプロジェクトがこの8月に始まった「Museum Start あいうえの」だ。上野公園内にある東京都美術館と隣の東京芸術大学が推進役となり、他7館が連携して、通年でプログラムが実施される。

東京・上野は実は世界でも類を見ないほど、ミュージアムが密集する場所。ミュージアム都市として知られるロンドンやワシントンと比べても、1館の規模こそ小さいけれど、その館種のバラエティーと密集度はピカイチだ。美術館が四つ、博物館が二つ、動物園、図書館、そして文化ホールに芸術大学が集まる。この10の施設がひそかに子供たちの「第三の場所」になったなら、世界中のどこにも見られない子供たちの新しい冒険がいくつも生まれるかもしれない。

と言っても、日常の世界から見えにくいミュージアムの世界に踏み出すには勇気がいるので、まずは冒険を始めるための学校「あいうえの学校」を作った。ハリーポッターの魔法学校ではないが、ミュージアムを舞台とした冒険の達人になるための学校だ。

既に8月から、この学校で冒険を始めている子供たちがいる。そして9月からは毎週水曜日の午後、東京都美術館では「放課後の美術館」が始まる。何だかよく分からないけれど、気になると思ったあなた。ぜひインターネットで「Museum Startあいうえの」を検索して、まずはウエブページへ！